

英語発音表記としての片仮名の功罪

池 中 雅 美

目 次

1. は じ め に
2. 諳厄利亞語林大成と興学小笈に於ける片仮名表記
3. 80年代及び90年代の辞書における片仮名表記
 3. 1 Schwa の表記
 3. 2 子音の表記
 3. 3 平仮名の使用
4. 片仮名の短所
 4. 1 代用音
 4. 2 母音付加
 4. 3 二重母音の長音化と短縮化
5. 片仮名の長所
6. お わ り に

は じ め に

私達が到る所で目にするカタカナは、外来語の表記として使用されているのが殆どである。英語に限らず、ドイツ語、フランス語、オランダ語、ポルトガル語等、中国語でさえカタカナで表記されている。元来、カタカナは中国語という外国語の読みを表記するために使われ始めたものである。片仮名の「片」とは、「不完全、または一部分の意である」と広辞苑にあるように、漢字の偏や旁を省画した作られたのが片仮名である。平安時代に始まり、紆余曲折を経て、今日の片仮名の表記に至っている。

英語は世界中の多くの国々で話されている。それゆえ、それぞれの国々の使い方、なまりなど多様にある。また言語自体も時代が変われば変わっていくのである。誰が標準の英語を話しているのだろうか。それならば、片仮名を使って完全でなくとも理解し得る範囲の発音でコミュニケーションが取ればそれで良いではないか。このような問いが課題となった。そこで、片仮名本来の役割の意義を探り、現在の英語音声教育に有益なものであるのか、あるいは百害あって一利なしのものなのかどうかを調べて見たい。片仮名イコール外国語、あるいは外来語というイメージが有るように思うが、片仮名は日本語である。そのために、生じる問題点を取り上げて、発音記号としての片仮名が存在できるのかを調べてみたい。

2. 諸厄利亜語林大成と興学小笈に於ける片仮名表記

明治時代、英語の教授法として変則と正則の2種類が主流であった。変則とは、西洋の書物の内容を読み取することを重視した方法であったため、英語の発音が十分でなくても良いという方針であったようだ。英語の発音に重きを置いた正則よりは、変則により多くの知識、西洋の文化を必要としていた時代であったのだろう。

諸厄利亜語林大成は、アルファベット順に編纂された、わが国最初の英和辞書である。一方興学小笈は、語林大成より3年前に作られた入門書であるが、これは幾つかのカテゴリー別に英単語がまとめられている。この2冊の書物に共通して記されている片仮名表記の特長を取り上げてみたい。

2.1 [r] と [l]

まず第一に、表記において [r] と [l] の区別は見つけれない。単語のどの位置に [r] 又は [l] が来ても、殆ど [ル] という表記がなされている。

	興学小笈/語林大成		興学小笈/語林大成
clear	ケレール	silver	シルフル
north	ノルス	dark	デルク
paper	ペプル	fire	ハイル

片仮名の [ル] は、ラ行の一音であり、[l] + [u] が一番近い、と言っても調音方法は片仮名 [ル] の方が、舌のより先の部分を、より短い時間歯茎に触れている。また、[l] のみの音だけではなく、[u] の音が付け加えられている。一文字一音の対応にはなっていないのである。最近の辞書の中には、[r] と [l] を区別するために、平仮名を使用しているものもある。例えば、東京書籍のニューホライズンや旺文社のチャレンジがそうである。

2.2 [ai] から [ei] へ

	興学小笈/語林大成		興学小笈/語林大成
shine	セイン	sky	スケイ
light	レイト	ice	エイス
life	レイフ	time	ティム
spider	スペイドル	fly	フレイ

第二に二重母音 [ai] が [ei] という表記に変わっている例を挙げてみた。この様な規則性が見られるのには何らかの理由があるように思う。スペリングと発音の関係を考えるならば、i と y が [ai] の音になっているが、興学小笈のアルファベット [i] の表記 [アエ] の [エ] という音が [ei] に通じていると考えるには少し無理があるようだ。

2.3 [d] から [t] へ

	興学小笈/語林大成		興学小笈/語林大成
land	レント	word	ウヨルト
road	ロート	head	ヘート
red	レット	ground	ゴロウント
mind	ミント	sand	サント

単語の語尾の [d] の音が [to] という表記で記されているのが次に示す特徴である。[d] と [t] の調音方法、場所は共に同じである。無声か有声かの違いだけである。語尾に [d] の音がある時には、破裂音であるため、閉鎖はされるが息の開放がなされず [t] と区別が付けにくくなる。そのため、語尾の [d] が [t] に聞こえ、[t] のみの表記が片仮名にはないために、[ト] と言う [o] という音を伴った表記になっているのではないだろうか。

2.4 [v] から [h] へ

	興学小笈/語林大成		興学小笈/語林大成
heaven	ヘーヘン	devil	デフル
wave	ウエーフ	dove	ドーフ
slave	スレーフ	love	ロフ

語尾に来る [v] の音に関しては、2.3 で述べたことと同じことが当てはまるように思う。語尾の [v] もまた、調音方法、場所も同じ無声音の [f] に聞こえるようである。しかし、[f] という音が日本語には無いため、[Φ] という音で代用され、表記もハ行が使用されている。

語頭あるいは語の真ん中にきているものに関しては次の例を見たい。

	興学小笈/語林大成		興学小笈/語林大成
very	ウエリ	every	エウエリ
seven	セウエン	service	セルウイス

heaven、devil のように [フ] という表記が使用されている一方、seven、every においては [ウ] という表記が用いられている。このことから考えると [v] という音については明確なルールがないように思われる。

2.5 [ne] から [子] へ

唯一漢字が使用されているのが [ne] という音に対してである。

	興学小笈/語林大成		興学小笈/語林大成
night	子イト	knife	子イフ
corner	コル子ル	new	子ウ

2. 6 Silent K と Silent E

Silent K とはスペリングの中の k が発音されないということであり、Silent E とは語尾の E が発音されないという決まりである。このルールに反して、興学小笈および語林大成では発音されるよう表記されている。これは全くスペリングから音を起こしているということを示しているのではないだろうか。

例：knees キニース stone ストー子
kite ケイテ

2. 7 [ou] から [-] へ

	興学小笈/語林大成		興学小笈/語林大成
hope	ホープ (ブ)	nose	ノース
go	ゴー	old	ヲールト

二重母音という概念が日本語にはないということ、そして [o] から [u] への口の動きが少ないことの理由で伸ばし音となる傾向があるのではないだろうか。

2. 8 興学小笈に於ける五つの言葉

次に挙げるには、直接片仮名表記の比較には関係していないが、興学小笈の最後の部分に載せられている五つの単語の意味を考えるととても興味深かったのでここに挙げてみた。

	興学小笈	語林大成
language	ランゲエース	ランヂュース
diligent	デイリゼン	デイリセン
exercise	エキセルセイス	エキセルセイスト
contentment	コンテンツメント	
congratulation	コングレチュレーション	

この五つの単語は外国語を学ぶという過程を表しているように思えた。言語 (language) を学ぶ時には、勤勉 (diligent) に練習 (exercise) に励み、そうすることにより習得できたときには、自分自身には満足感 (contentment) が得られ、そしてそのことを喜び、祝える (congratulation) のではないか…というように、この五つの単語を繋げて文章を作成できるというのは興味深い。

3. 80年代及び90年代の辞書における片仮名表記

主に中学生に向けて出版された辞書に片仮名表記が見られる。あまり相違はないようだが、各辞書の工夫が成されている部分に注目してみたい。

3. 1 schwa の表記

六冊の辞書を取り上げてみた。東京書籍のニューホライズン、学研のジュニアアンカー、福

武のチャレンジ、旺文社のスタディ、そして三省堂のクラウンである。そのうちの三省堂のクラウンと旺文社のチャレンジの二冊が schwa の音に「ア」、「エ」、「イ」、「オ」、「ウ」という五つの表記を与えている。強勢を受けない母音は schwa [ə] や [ɪ] になることが多く、前述の五つのうちのどの表記でも書き表され得るということを二冊の辞書は示している。

例

[ア]	America	[əmérikə]
[エ]	moment	[móumənt]
[イ]	beautiful	[bjú:təfəl]
[オ]	of	[əf]
[ウ]	beautiful	[bjú:təfəl]

スペリングとの関連性もあるようだ。America の A が schwa の音であるが、スペリングが A であるためアが用いられ、同様に、moment の me の部分にはエが、beautiful の i がイというようになっている。これは、かつて英語を学ぶ上で片仮名を使った時と同様、スペリングから発音を起こしてきた習慣が現在も未だ残っているということが言えるのではないか。

3.2 子音の表記

三省堂のクラウンには小さな文字で、欄の右上に子音が表記されている。日本人にとって子音の発音は難しい。片仮名という表記に見られるように、子音+母音という形が日本語であるから、どうしても母音が発音されがちである。クラウンの工夫は母音が発音されないようにするためのものようだ。

3.3 ひらがなの使用

東京書籍のニューホライズンと旺文社のチャレンジには平仮名も登場している。日本語に全く無い音 [v]、[f]、[ŋ] を示すため、また、[θ] と [s]、[z] と [ð]、[l] と [r] のような区別をつけるために平仮名が使用されている。表記上の区別はつくが、実際発音する時にはどちらかで代用してしまうということも起こり得るのではないだろうか。

4. 片仮名の短所

発音器官が形成されるのはだいたい3歳から12歳のころとされている。そして20歳を過ぎれば特別の訓練を受けない限り、新たな音を発するのは困難であるようだ。ここ何十年間は外国語、つまり英語を義務教育として学校という組織の中で学び始めるのは、中学一年生からである。これは前述した発音器官が形成されたあとに外国語を学び始めるということになる。母国語である日本語の音で発音器官が形成されてから外国語を学ぶということについては、二つの相反する見解がある。一つには、母国語での発音器官の形成には意味があり、外国語を学ぶ以前に必要なことだとする意見である。もう一つは、母国語で発音器官が出来上がってしまったからでは、母国語に無い外国語の音がつくれない可能性が大きくなるというものである。発音重視の立場に立てば、早期教育に賛成することになるが、ここでは早期教育はとりあげない。

次に取り上げるのは学習者が日本人であるために生じる問題点、つまり母国語の干渉について述べてみたい。

4.1 代用音

日本語には母音は五つだけであるが、英語は二重母音も含めて二十の母音がある。次に示す図は日本語と英語のそれぞれの母音の調音位置、方法が全く異なっていることを示している。

〔英語及び日本語の母音表〕

i: イ i		u: ウ u
e エ	^ (ə)	ou オ
æ	ア a	ウ

英語音声学

—日本語との比較による—

図の中の [æ]、[^] ([ə])、[a] はすべて日本語の「ア」で代用されている。

例：pan パン pursue パスー
 pun パン

日本語のアが英語の [æ]、[^]、[a] のちょうど真ん中に調音位置がきているため、一番近くにあり、似ている音ということで代用されるのであろう。

[i:] と [i] についても日本語のイー、イを代用することが多いようである。図で見るように日本語のイより [i:] は舌の位置が高く、同時に緊張させて発音されるべきであり、[i] はイより舌の位置は低く、力を抜いて発音されるべきである。しかし、[i:] と [i] 両方とも日本語のイで代用し、この [:] 二つの点が伸ばし音の印のようにとられイーとイで区別している。同じことが [u:] と [u] についても言えることである。

また、母音のみでなく子音についても代用音が問題となる。第二章で触れた部分であるが、80年代及び90年代の辞書の平仮名使用についてである。[θ] と [s]、[ð] と [z]、[l] と [r] のそれぞれの音をさとサ、ざとザ、らとラで区別をつけているが、この表記から実際の音の違いを知るのには難しいであろう。また、日本語にない音 [v]、[f] 等についても日本語の [Φ] で代用しているのである。

4.2 母音付加

日本語は開音節の言語であり、英語は閉音節の言語である。この違いが子音で終わるはずの音に母音が付加されることになる。諺厄利亜語林大成、興学小笈でも語尾に母音が付加される例を見いだすことができる。

love ロフ time テイム light レイト dark デルク

また、すでに外来語として使用されている語については語尾のみでなく、殆どの子音のあとに母音が付け加えられている。

例：

strike → sutoraiku ストライク

Christmas → kurisumasu クリスマス

例に見られるように、音節の数も増え、英語特有のリズムをも変えてしまうことになっている。

4.3 二重母音の長音化と短縮化

第二章 2.7 で取り上げた [ou] という二重母音が [オー] という伸びた音になる傾向が多いということである。以下は語林大成、興学小笠での表記である。

hope ホープ nose ノース go ゴー old ラールト

今日でも [ou] に限らず、[ei]、[i] などにおいても伸ばし音が使われることがある。

tape テープ cake ケーキ boy ボーイ

また、二重母音が短縮される場合がある。

ground グランド [au] → [ア] baby ベビー [ei] → [エ]

日本語には二重母音が無いため、このような間違いが起きるのであろう。長音化、短縮化については表記の問題は解決され得るように思う。

5. 片仮名の長所

平安時代、中国語が日本に移入され始めた頃、中国語の音を表記するために片仮名が使われ始めた。片仮名の使用され始めた目的を考えると、発音記号と同じような役割を担っていたと考えられる。片仮名がかつて担っていた役割を、今英語に対して果たせ得るかもしれない、という考えが浮かんでくる。確かに今までに、日本語の干渉を受けることは必然的であり、表記の点で限界があることを述べてきた。しかし、ただ一つ、片仮名の長所として挙げられるのは、片仮名は日本人にとって親しみやすいということである。片仮名は、現在の私達の生活においてはどこでも見出せるものであり、片仮名を見れば誰でも読むことができるということが言える。そのことが、全く異なった言語、英語に対して抱くであろう距離を縮めることに繋がるのではないだろうか。

発音記号といっても、様々な表記がある。それに加えて、今までに見たことも無い記号が多くある訳であるから、片仮名のように見て直ぐには読めないであろう。また、本当に正しい音が発せられているかどうか問題となろう。正しい音だと思い込んでいて間違った発音をしているということも考えられる。

親しみやすさが学習者の動機づけの一要因となることもあるだろう。全く読めない発音記号を初心者が見れば、その段階でつまづく可能性も大きいと言える。発音記号を一旦習得してしまえば大変便利なシステムであるが、発音記号で挫折してしまう学習者が出ることは、残念なことである。

6. 終 わ り に

はじめに、片仮名の片とは不完全、または一部分という意味であると述べたが、やはり、片仮名の短所ばかりを取り上げざるを得なかった。確かに日本人にとって、片仮名は親しみやすいのだが、片仮名は日本語の表記の一方法であるということを再認識させられたようだ。性質の違う言語であるため、ある音は代用されたり、またある音については母音が付け加えられたり、表記の限界を知らされた。表記の限界があるということは、実際音を出すときに、片仮名表記を見て音を出すのであるから、音自体にも影響を及ぼすということになる。

片仮名の短所を特に二つの点について注目してきた。代用音と母音付加である。日本語の近い音で代用しているものについては、正しい音が模範として与えられるべきであろう。また、一文字一音という表記の規則上、母音が付け加わることは規則外であるから、これも片仮名には発音記号の役割を果たすことは出来ないということになるだろう。

英語学習における片仮名の現状を知るために本学英語科学生へのアンケートを取ってみた。その結果、83%の学生が中学・高校時代に読めない英単語に片仮名で振り仮名を打ったという経験をしているのが判った。また、半数以上の学生が、中学や高校で発音記号を習っていないにもかかわらず、発音記号を半年、あるいは一年学習することによって、片仮名表記よりも発音記号の方がより分かりやすく感じるようになっていくということも同時にわかった。このことから、難しいと思われる発音記号でもある期間学習することによって、片仮名より判りやすいと感じるようになるのだということが示されたように思った。英語を教える立場に立った時、やはり理想は完全を目指すというか、より完全に近いものを目標としなければならないだろう。この目標を達するためには片仮名は使用してはいけないことになる。現在は発音記号が未だ無く、片仮名しか無かった時代とは違う。今は発音記号があるのだから、母国語の干渉は避けられないとしても、初期の段階、中学生或いは高校生の時に正しい発音記号に関する知識、そして正しい音が模範として与えられることが望ましいように思う。しかしながら今後英語学習者の数が増え、英語学習がより一般化されるようになった時には、不完全ではあるが、片仮名の果たせる役割も見つかるのではないだろうか。

参 考 文 献

- 諳厄利亞興学小笈 1811
 諳厄利亞語林大成 1814
 ジュニアニューホライズン 1990 東京書籍
 ニュージュニアアンカ 1991 学習研究社
 スタディ 1980 旺文社
 ジュニアクラウン 1987 三省堂
 Gimson, A. C. 1980 An Introduction to the Pronunciation of English
 Edward Arnold Publishers LTD., London

英語発音表記としての片仮名の功罪

- 一色マサ子, 松井千枝 1977 英語音声学—日本語との比較による— 朝日出版社
Practical English Education 22. 1986 開隆堂
高梨健吉 1975 日本の英語教育史 大修館
竹村 覚 1982 日本英学発達史 名著普及会
田辺洋二 1987 英語教育史における発音の片仮名表記 日本英語教育史研究第2巻
若林俊輔 1980 英語教育のあゆみ 中京出版